第４章　京都大学北部構内BD30区の発掘調査

浜崎　一志

１　調査の経過

京都大学北部構内は，白川の形成した扇状地上に位置する。この扇状地は人々の居住に適していたらしく，北部構内の11～13・16地点で縄文時代の遺跡が，54地点では弥生時代と平安時代の遺跡の存在が明らかになっている(図版１)。こうした中で本調査区に北部構内実験排水槽が設置されることになり，試掘調査をおこなったところ，弥生時代，平安時代および江戸時代の遺物が出土したため，設置予定地全域の発掘調査をおこなうことになった。

２　層　　位(図版11，図16)

調査区の地表は標高約63ｍで，東から西へ緩やかに下がる。第１層は現代の盛土。第２層はＳＸ１の埋土である。ＳＸ１は下層の青灰色土を掘込んだ瓦溜で，江戸末期の瓦が出土した。青灰色土は近世の耕作土で，ＳＸ１に切られている。青灰色土以下黄砂までの地形は，調査区中央付近で南から北へ段状に低くなる。第３層(赤褐色土)～第６層(暗赤褐色土)は調査区北半部の中央付近に存する東西方向の凹地に堆積している(図18梨地部分)。第３層と第４層からは，９～10世紀の遺物が出土した。第５層は無遺物層であった。調査区南半部では，盛土の下に茶褐色土(第９層)，淡褐色土(第10層)がうすく堆積し，その下はすぐに黄砂(第11層)となる。黄砂は上層の細砂から下層の礫混り粗砂まで６層に細分できる。第12層になると直径が２ｍ近くもある花崗岩礫を含む礫が混じり，白川の土石流跡

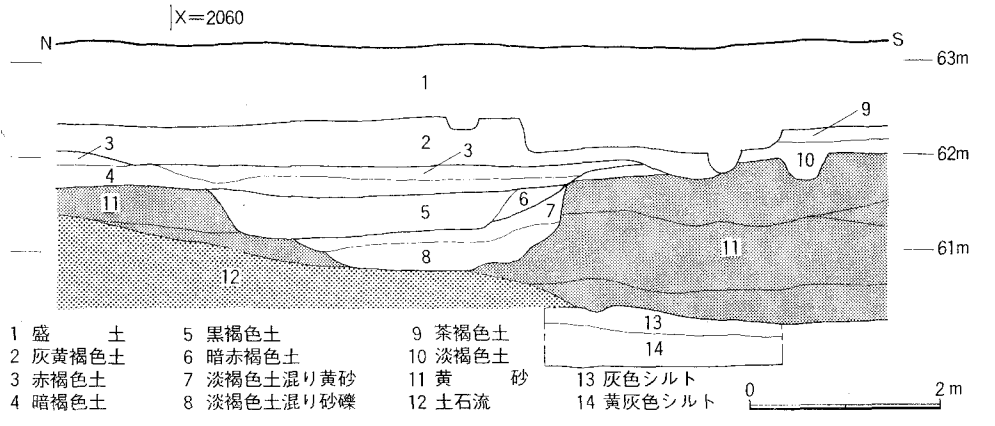

図16　調査区東壁の層位　縮尺1/80

と考えられる。この第12層の堆積は北東が高く，西へ低くなりながら続くものの，南へは調査区のほぼ中央で止まる。東から西へ流れた土石流の南端を検出したものと推定される。この土石流の発生は弥生前期末～中期初頭であろう。第13層，第14層はほぼ水平に堆積したシルト層で，第13層の直上より縄文晩期の凸帯文土器小片が出土した。

3　近世の遺構(図版10-１，図17)

瓦溜，柵，溝がおもな遺構である。瓦溜はいずれも青灰色土上面で検出した。江戸末から明治初頭の遺構である。ＳＸ１は青灰色土を10～20㎝掘下げて，瓦を廃棄したもので，南北長は7.7ｍに達する。ＳＸ２，ＳＸ３は深さ10㎝程度の浅い瓦溜で小片ばかりが出土した。ＳＸ４は深さ約１ｍにおよぶ深い瓦溜で瓦片も大きなものが多い。これらの瓦溜から出土した瓦は，造りが非常に丁寧であることや，獅子口瓦，蟾羽瓦，雁振瓦まであることから，一般の民家に葺かれていたものとは考え難い。「改正京町御絵図細見大成」慶応４(1868)年刊を見ると，本調査区一帯には，土佐藩邸が描かれており，これらの瓦は土佐藩邸内の建物に葺かれていた可能性が高い。柵ＳＡ１～ＳＡ８，溝ＳＤ１～ＳＤ17は方位を真北から約11°東に振る遺構群で，江戸後期の耕作にともなう遺構と考えている。ＳＤ3～ＳＤ８・ＳＤ11～ＳＤ16はそれぞれ一群の遺構で，幅半間の畑の畝にともなうものであろう。ＳＡ１～ＳＡ４・ＳＡ７・ＳＡ８

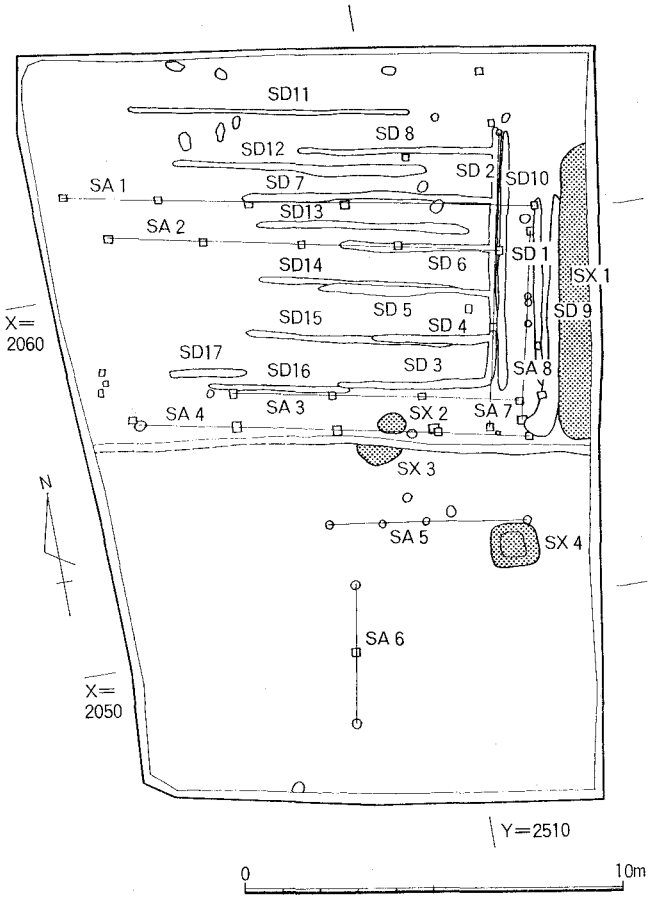

図17　近世の遺構　縮尺1/200

は耕作物の乾燥等に用いた柵の遺構であろう。

4　古代の遺構(図版10-2，図18)

建物ＳＢ１，柵ＳＡ９～ＳＡ11，溝ＳＤ18～ＳＤ21，土坑ＳＫ１～ＳＫ３がおもな遺構である。建物ＳＢ１は東西２間，南北１間を確認したが，北へ延びる可能性がある。柱間は2.1ｍで，建物の方位は真北から東に5°振る。柱穴からは10世紀前葉の遺物が出土した(図20)。ＳＡ９～ＳＡ11はいずれも２間分のみを確認しえた柱穴列である。ＳＡ９・ＳＡ10の柱間は，2.1ｍでＳＢ１と同じであるが，ＳＡ11は3.0ｍとやや長い。方位はＳＡ10・ＳＡ11が5°前後真北から東に振るのに対し，ＳＡ９は15度東に振る。各柵列の柱穴から，10世紀前葉の遺物が出土した。溝ＳＤ19～ＳＤ21は黄砂層の高い調査区南半で検出した。方位はいずれも真北から14°東に振り，10世紀前葉～中葉の遺物が出土した。ＳＤ19が最も残りがよく，幅50cm，深さ15cmを計る。ＳＫ２は一辺約１ｍの隅丸方形の土坑で，深さは約50cmであった。11世紀前半の完形の土師器皿(Ⅲ６)や壁土と思われる苫(すさ)の入った泥土塊が出土した。

以上が古代の遺構のおもなものであるが，土坑は北半部の一段低い所で多数検出され，溝は南半部に分布した。調査区中央の段差を境にして，当時の土地利用に差異があったと思われる。

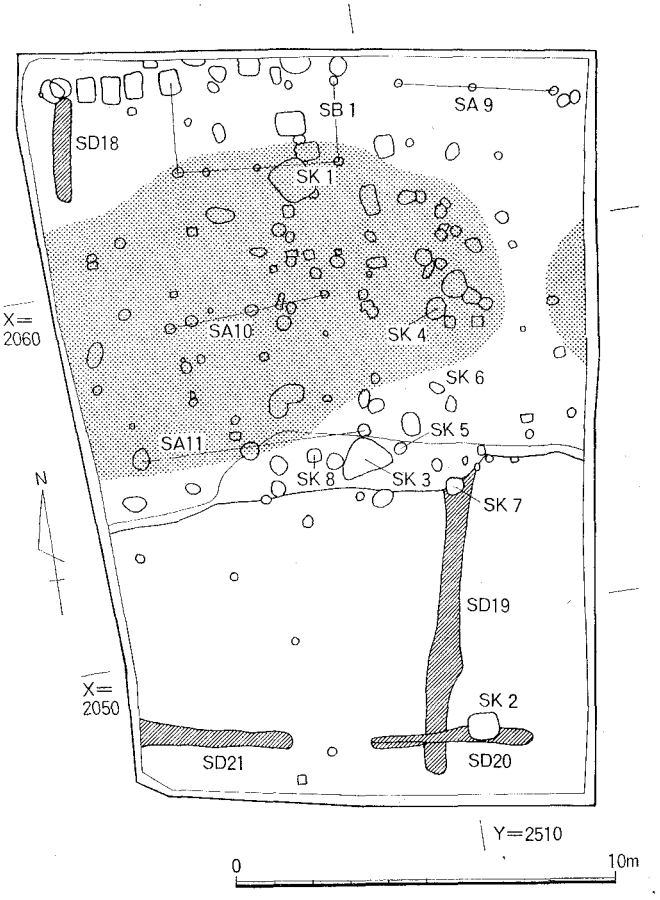

図18　古代の遺構　縮尺1/200

5　遺　　物

(図19～21)

本調査では整理箱に25箱分の遺物が出土した

が，近世の遺物が19箱を占め，古代の遺物は６箱，縄文・弥生時代の遺物は小量であった。古代の遺物は主としてＳＫ１～ＳＫ８，ＳＤ19より出土した。以下では遺構出土の遺物を中心にその概略を記す。

縄文・弥生時代の遺物(図19)　Ⅲ１は打製石鏃，Ⅲ２は磨製石斧であるが，Ⅲ１は黒褐色土，Ⅲ２は暗褐色土から出土しており，原位置を保っているとは考えられない。そのほか図示していないが，縄文土器・弥生土器の小片も出土している。

古代の遺物(図20・21)　土坑ＳＫ１からは，Ⅲ３～Ⅲ５の土師器とⅢ９・Ⅲ10の黒色土器が出土した。Ⅲ３は口縁部に鋭い面取りを施した杯。Ⅲ４・Ⅲ５は10世紀前半と思わとる土師器皿で，「て」字状口縁手法B_1類に相当する。Ⅲ９・Ⅲ10は黒色土器の鉢と甕で暗文をもち内面全面と外面の口縁部に炭素を吸着させている。土坑ＳＫ２からは土師器皿(Ⅲ６)と灰釉陶器の椀(Ⅲ７)が出土した。Ⅲ６はB_3類にあたり，11世紀前半のものである。Ⅲ８はＳＫ３から出土した緑釉陶器の皿で，須恵質に焼成されており，黄色の斑点をもつ。釉は淡緑色を呈し，外面の口縁下部には一条の凹線がはしる。土坑ＳＫ４からは，土師器(Ⅲ11・Ⅲ12・Ⅲ14)，緑釉陶器(Ⅲ13)，黒色土器(Ⅲ15～Ⅲ17)が出土した。Ⅲ12はB_1類の杯，Ⅲ14は甕で内面に刷毛目を残す。Ⅲ15・Ⅲ16は外面胴部と内面頸部に，暗文を施した甕で，Ⅲ15は内面胴部に刷毛目を残す。Ⅲ17は内面全面に篦磨きを施した椀で，外面の口縁部には横撫でを施し，それ以下には指頭圧痕を残す。ＳＫ５からは土師器(Ⅲ18～Ⅲ21)，須恵器(Ⅲ25)が出土した。土師器はいずれもB_1類の杯で，10世紀前葉のものと思われる。Ⅲ18は内面に幅広の刷毛目を残す。Ⅲ25は須恵器水瓶の底部である。Ⅲ22はＳＫ６出土の高台のつく土師器杯でB_1類にあたる。Ⅲ24はＳＫ７出土の黒色土器椀で，内面には丁寧な篦磨きの上に暗文が施されている。Ⅲ23は溝ＳＤ19出土の土師器皿でB_2類にあたる。Ⅲ26はＳＡ11の中央の

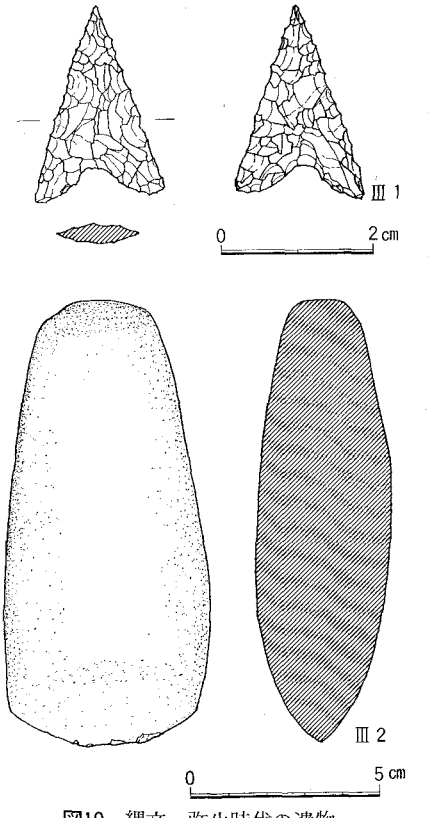

図19　縄文・弥生時代の遺物
縮尺1/1(Ⅲ１)，1/2(Ⅲ２)

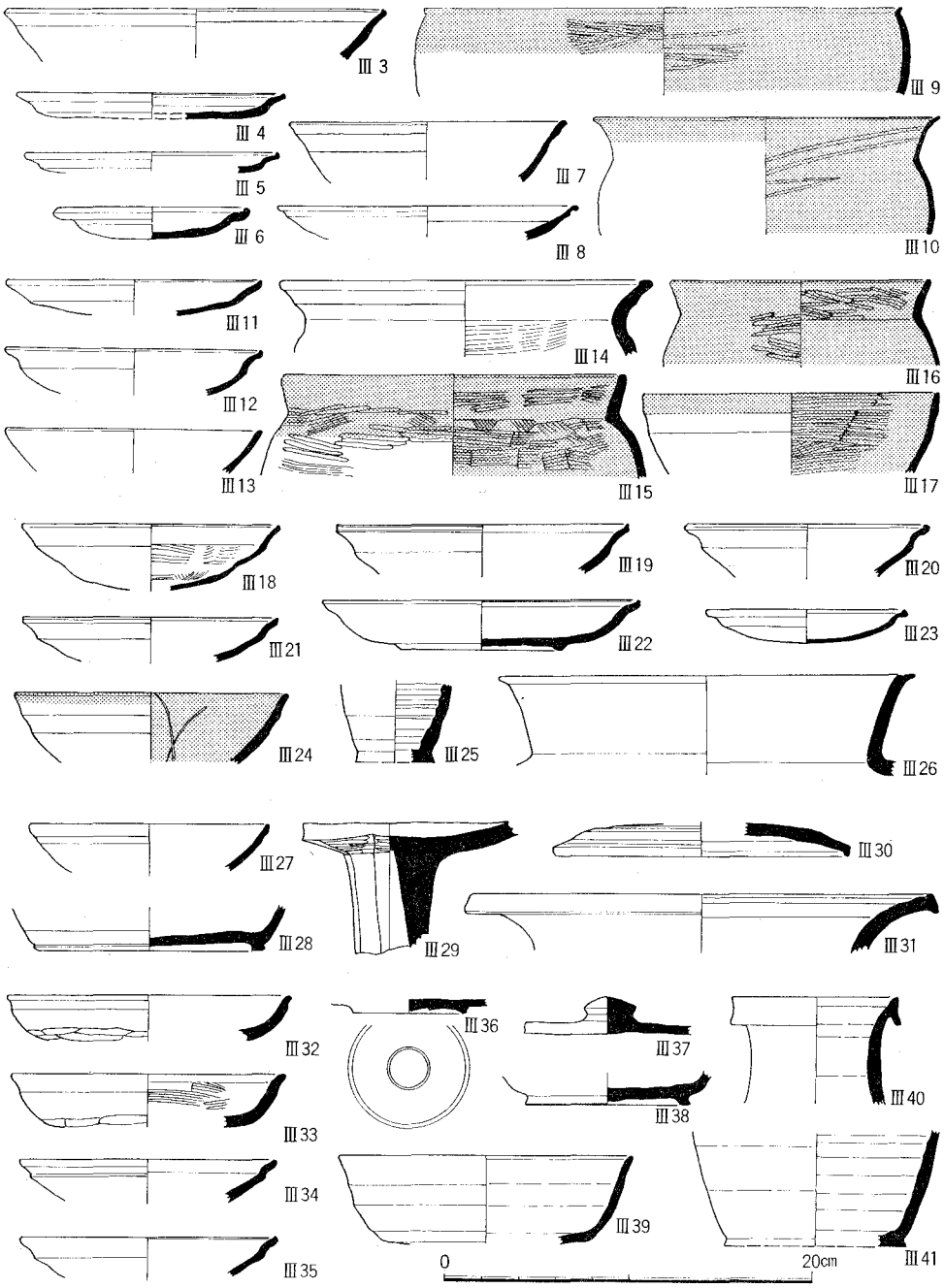

図20　ＳＫ１出土遺物(Ⅲ３～Ⅲ５土師器，Ⅲ９・Ⅲ10黒色土器)，ＳＫ２出土遺物(Ⅲ６土師器，Ⅲ７灰釉陶器)，ＳＫ３出土遺物(Ⅲ８緑釉陶器)，ＳＫ４出土遺物(Ⅲ11・Ⅱ12・Ⅱ14土師器，Ⅲ13緑釉陶器，Ⅲ15～Ⅲ17黒色土器)，ＳＫ５出土遺物(Ⅲ18～Ⅲ21土師器，Ⅲ25須恵器)，ＳＫ６出土遺物(Ⅲ22土師器)，ＳＫ７出土遺物(Ⅲ24黒色土器)，ＳＤ19出土遺物(Ⅲ23土師器)，ＳＡ11出土遺物(Ⅲ26須恵器)，暗褐色土層出土遺物(Ⅲ27・Ⅲ29土師器，Ⅲ28・Ⅲ30・Ⅲ31須恵器)，赤褐色土層出土遺物(Ⅲ32～Ⅲ35土師器，Ⅲ36緑釉陶器，Ⅲ37～Ⅲ41須恵器)

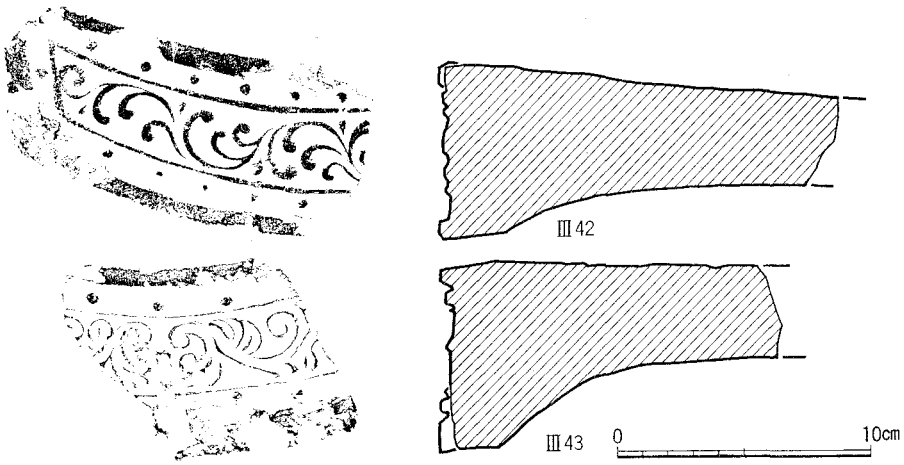

図21　調査区出土軒平瓦　縮尺1/3

ピットから出土した須恵器広口壺の口頸部である。Ⅲ27～Ⅲ31は第４層から出土した遺物である。Ⅲ27は口縁部に１段の横撫でを施す土師器杯。Ⅲ28は高台のつく須恵器杯の底部。Ⅲ29は土師器高杯の杯部と軸部の一部である。脚部の断面は八角形で表面は丁寧に磨きあげられている。Ⅲ30は須恵器杯蓋。Ⅲ31は須恵器の甕の口縁部である。Ⅲ32～Ⅲ41は第３層から出土した。Ⅲ32～Ⅲ35は土師器の杯。Ⅲ32・Ⅲ33はA_1類の杯で，９世紀のものと思われる。Ⅲ34・Ⅲ35はB_1類の杯。Ⅲ36は緑釉陶器皿の底部で蛇の目高台がつく。Ⅲ37～Ⅲ41は須恵器であるがⅢ40以外はいずれも生焼けで灰白色を呈する。Ⅲ37は宝珠のつまみのつく杯蓋。Ⅲ38・Ⅲ39は杯。Ⅲ38には外にふんばる高台がつく。Ⅲ40は壺の口頸部で口縁端部は上下に伸びる。Ⅲ41は壺の底部。Ⅲ42はＳＫ８から出土した平安前期の均整唐草文軒平瓦であり，Ⅲ43は表土から出土した平安中期の均整唐草文軒平瓦である。

６　小　　結

今回の調査により，弥生時代の地形・環境や，平安前・中期および江戸末期の本調査区一帯の状況を明らかにできた。弥生時代については，弥生前・中期ごろは本調査区一帯が白川の谷であったが土石流により白川の流れは南に押しやられたことが判明し，この時期の地形・環境復原の貴重な資料を得た。また，平安前・中期の遺構，遺物の出土状況が，この時期の「寺院址」にごく近いと想定している９地点(図版１)の状況に似ていることから，本調査区がその寺域内に含まれている可能性が高いことがわかった。また，幕末の土佐藩邸のものと思われる遺構，遺物をはじめて明らかにできた。